

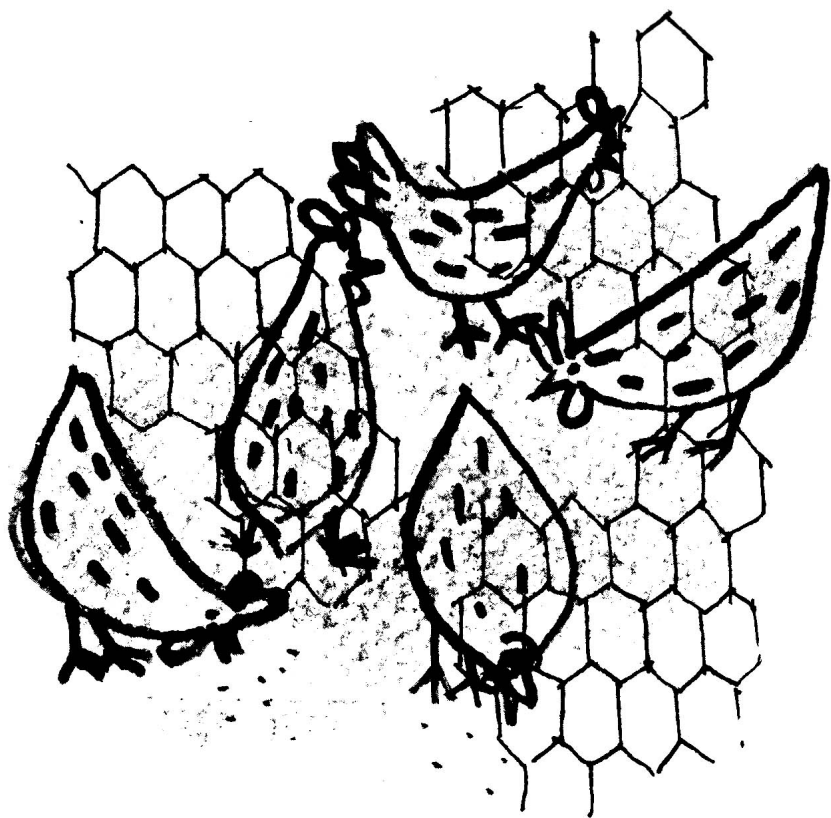
山田多賀市

雑草



雑草

山田多賀市



山田多賀市 ● 雜 草

昭和四十六年二月十日 発行

定価 五八〇円

著 者 山田多賀市

発行者 藤山真人

発行所 株式会社 東邦出版社

東京都千代田区神田神保町二〇二八

(倉木ビル内)

電話 東京(二六)五七三五〇七
振替 東京 八五二七五

第一章

冷たい風の吹く夕刻であった。二才になる妹を背負って、庭にいた健助は、病床から母が何事かを訴えているのに気がついた。家の中へはいってみると、たった今、うめくような声で何か言っていた母が、床から半身をのりだしてたおれていた。

子供の健助にも、声もたてず、うつ伏している母のようすはただならぬものと映った。近づいて母の口に手をあてて見ると、母の息はたえていた。

村一番の貧農である上に、健助を頭に五人産まれた子供は、長男の健助と一番末の妹だけが生きのこり、他は、二才か三才になると次々と死んでしまっていた。その妹も母の死後一年あまりで死んだが、当時、子供の死ぬのは、けっしてめずらしいことではなかった。どこの家でも子供は死んだ。むしろ十才を越えるまで生きぬいた子

供の方がめずらしく、生きぬいた者には異常な体力があった。

母は半年以上、寝たきりだった。貧乏などという言葉では表現できない、赤貧も、その極みであった。そして母の死んだ年が明けて正月になると、こんな家庭へ、二度目の母が来た。

その時、父の市之助は四十二才であった。新しく来た母、おまつは二十三才であった。新しい母は、父のころへ来た時、健助の妹と同じかぞえ年、三つの女の児を背負ってきた。

この新しい母、おまつは、十才の時から他人の家の子守り奉公に出て、十七才の頃からは女中奉公をしていた。二十一才の時、父親のわからない子供を産んで、その子供を抱えて身のふりかたに困っていたのを、世話する人があって、健助の父のところへ後妻にきたのであった。

おまつが生家は、隣部落であった。その家族の者は、耕す土地も持たず、父も母も農家の多忙な時、日雇いをして暮らし、農閑期には、山にはいつて薪をとったり、炭を焼いて、暮らしていた。こういう家庭での常として、おまつはわずか十才で口べらしのために、働きに出たのである。そして、今が働き盛りというときに、父親のわ

からない子供をはらんで、生家からは追いはられるようにして、親子ほども年の違う男やモメのところへ、生活を求めてやって来たのだった。

時は明治から大正へと年代が変ったばかりであった。生活保護などという字の綴り合わせもなかった時代だ。病めば自分の甲斐性で医者にかかり、金が払えなければ医者は死亡診断書さえ書いてはくれない。そういう時代に、夜這いに来た若者の相手になって、子を産んで人生に踏みまよった農村労働者の娘は、村一番の貧乏小作人の四十男のところへでも、生活を求めるよりほかはなかったのだ。

信州、日本アルプス山麓の寒村でも雪がとけて、農業がはじまると、健助に二人の子供の守りをさせておいて、父の市之助は、新しい母を連れて、田畑に出て働きはじめた。

十才の頃から、他人のなかで育ってきた新しい母、おまつは背丈は四尺あまりの少女だが、鼻は空を向き、頬つべたは真赤でコロコロふとり、不恰好なところは、岩石山で風雪にいためつけられ、いじめてちぎんだ古木を思わせた。それでも頭の Teppen から出るような、キンキンした精力的な声で、こんな生活のどこに笑いの材料

が見つかるのか、元氣よく笑っていた。

日露戦争の出征兵士で、背も高く、力自慢の市之助が、追いたてられるほど、若いおまつはよく働いた。

「市上等兵のやつ、とんだ拾いものをしたぞ、若いし、それに働くし」と村の人々は噂し合った。

早く死ぬくらいだったから健助の母は、病弱で色が白く、背がすらりとのびていて、盆や祭りの時、自分の手で半日かかって丸マゲにゆい、お歯黒をつけていた。

物持ちの妻になっていれば、六十や七十くらいは生きられたろうに、三十六の若さで、骨と皮ばかりにやせ細り、のこる子供に思いをはせて死んだのであった。

貧乏人が生きるのに必要なのは、美しさではない、どんな風雪にも、へこたれずに働く力である。健助は新しい母をながめて、そう思うのであった。

山麓の、早い田植えの終った六月初め、一里はなれた隣村の大工の親方のところへ、健助は子守り奉公にだされた。健助の自活の人生はその時からじまったのである。一年、子守り奉公をして、二年目からは、大工の見習となり、二十一才、兵隊検査の年まで年務めれば、

大工道具一揃いに、錢を五十円くれるという約束であった。そして父の市之助は、手付金として五円、健助を連れて行った時、大工から受けとって帰ったのである。五円の手付金で、息子を社会に売りに出したのだ。

「大工はよい仕事だぞ、一年中、降り照りなしに働ける」市之助は健助にしみじみ言った。水呑百姓より、職人の方が市之助にはよく見えていたようである。

大工のところでは、百姓も一町歩あまりやっていた。田植え、稲刈り、脱穀など、農繁期には、大工の親方が弟子たちと共に働き、草取り、水引きなどは、大工の女房がやっていた。

健助は弟子入りした次の日から、親方の子供の守りをさせられ、夜になると藁を一束与えられて、親方や兄弟子たちといっしょに、縄をなうことを命じられた。

親方と兄弟子二人は、一時間ばかりでないあけて、さっさと寝床へ引きあげていった。健助は三時間かかっても仕上げることができなかった。そのうえ健助の縄は、太いところや細いところがいっぱいある。寝床の方からきこえてくる兄弟子たちの寝言をききながら、一人取りのこされて、十二時頃までかかった。

朝はまだ暗いうちに起こされた。起きると大きな竹の

籠を背負って、その籠にいっぱい草を刈って来ることを命じられた。草刈りに行くのは健助だけで、親方と兄弟子たちの朝の出勤は早い。健助といっしょに起きて、道具箱をかついで、仕事に出かけた。

朝の食事は仕事先へ行ってから食べて、親方の日当が一円、兄弟子たちはまだ半人足だから、三十錢である。一里あまりの道のりなら、朝食に間にあうように歩いて通うのであった。健助の場合は、まだ半人足にも足りないのので、先方へ行って三度の飯を食わしてもらうだけで、日当は一錢も支払われないということだ。

職人は、早飯、早糞、早返事と言って、弟子が親方より、時間をかけて飯を食ってはならない。親方の済まぬうちに終って座を立たなくてはいけないのである。親方は弟子を思いやって、ゆっくり食うが、それでも多年、早飯に年期がはいっているだけに、人並みよりは早い。「おい」と、よばれて、その語尾の終わらないうちに「へい」と答える。糞小便は、人に気づかれない間に、手早く済まなくてはいけない。職人というものは、人の仕事を引き受けて働く者である。手ぎわよく、手っとり早く、人の氣にいる仕事ができなくてはならない。のろい奴では職人になれないのであった。

職人は身だしなみも、キツチリしていなくてはならぬ。親方や兄弟子たちも、紺の股引に、腹掛け、ハッピーで仕事に出かけるが、仕事から帰って、縄をなう時や、百姓仕事をする時は、ツギの上にツギが当って、本家のわからないようなボロを着ている。健助はいつも、兄弟子たちの着古しをちぎめたのを着せられていた。

親方の家は、健助と同じ年の男の子を頭に、四人の子持ちであった。親方の女房も、たいていの夜、みな縄をなう横で、弟子たちのボロに針を運んでいた。健助が居眠りをする、二尺の物差しで軽く頭や肩をついた。親方のところばかりではない。村中の百姓も変わりなく、ツギだらけの着物を着て、夜となく昼となく働いていたが、誰れもみな貧しかった。

一生のうちで、健助は、大工の弟子になった頃が、一番骨身にこたえたとみえ、六十才になってからもときどき、縄をなっていると、いくらなつても、藁が次から次と、うず高く前につみ上げられて、身動きの出来なくなる夢を見ることがある。

親方の息子にも、「おい」と、よばれたら、「へい」と、答えなくてはいけないと、教えられてあった。三つか四つの鼻たれに「おい」と、よばれて、「へい」と答

えるのは、どうにも健助には腹が立ってしかたがなかった。

尋常五年生になる親方の息子は、学校から帰ると、大きな声で読本や修身の復習をしていた。「君に忠に、父母に孝に」息子には親方の女房はやさしかった。

健助の腹のたつことがもう一つあった。親方の息子は、健助を家来でもあるように、「君に忠に……」と、言っていて、いろんな用事を言いつけた。便所へ行くのに、わざわざ紙も何も持たずに入って、「おい、健、紙もってこい」と命じて取りよせた。

それが毎度のことなので、腹をすえかねた健助は、「てめえのケツふくなんか、紙なんかいらんぞ、糞で沢山だ。そこにある束の中から引きぬいて使え……」と言った。

「なにおッー」と、言って、便所から出てきた息子は、桑の棒の先で、糞つぼをかきまわし、その棒で健助の顔をビシリと打った。

「こいつがッ」腹を立てた健助は、親方の息子に、便所のわきにある肥溜の中へ、足がけをかけて、つき落してやった。丁度、麦蒔きの落んだあとで、肥溜めの中には糞尿は少ししか残っていなかった。それでも息子は糞ま

みれになって大声で泣き叫んだ。息子の泣声に、とんできた大工の女房は、臭い子供のケンカに尻ごみした。

親方の息子は、糞汁をしたたか呑んだおかげで、その日から富山の売薬を呑んで五日も寝こんだ。女房の話をきいて、親方は健助を目から火の出るほど、張りたおしたし、兄弟子たちも、その尻馬にのって忠義ずらし、かわるがわる健助を張りたおした。

親方の息子が、ようやく青い顔して学校へ行けるようになった翌日、弟子の一人が健助の父親をよびに行った。「とほうもねえことするにもほどがある。もし肥がいっぱいあれば死ぬところだった」と親方は言った。

父の市之助は返す言葉もなく、健助を連れて帰った。健助は、大工のところを追いだされたのである。

もう日本アルプスの中腹まで雪におおわれ、田には裏作の麦が頭をのぞかせていた。

大工の家を追いだされた健助は、久しぶりに父の家でグッスリ眠った。眠りからさめると、もう夕方であった、シベリヤから渡ってくる体の小さいカラスが、空に群れてとんでいた。

「同じ年頃の息子があっては、ケンカもする。しょうねえ、こいつも名古屋へ連れてゆくか」と、父は言った。

健助を大工のところへ出して食い口をへらし、新しい母と共に一年働いたが、小作料を納め、先妻の病気でこつていた借金を返すと、翌年の収穫まで食いつなぐには足りなかった。

麦を蒔き終ると、冬のあいだ、女房、子供を引き連れて、市之助は名古屋の町に出て働く決心をしていた。

名古屋には、市之助の姉、おふうが住んでいた。おふうの夫は名古屋の町で、日雇い人足をやっていた。名古屋ではヒヨカタと言った。その姉夫婦をたよるつもりである。

家の戸口を釘づけにしておいて、のこった穀類は地主にあずけ、市之助は夜具を背負い、末娘を抱いた。おまは竹棚を一つ背負った。健助は新しい母の連れてきた女の児を背負った。村を出たのは北風が吹いて雪の降りはじめた夜半であった。親子五人、中央線田沢の駅まで、二里の道を歩いた。雪はやむことなく降っていた。

「これが根雪になるな」市之助は、ポツンと云った。誰も返事をする者はなかった。

田沢の駅へたどりついた時、雪は一尺近く積もってい

た。駅で握り飯を食べた。握り飯は白い米の飯であった。各駅に停車する汽車で、親子五人が二つのイスを占領し、名古屋の千種の駅まで十時間かかった。

信州の山野は白一色に包まれていたが、名古屋の町には夕景がせまって、風は暖かった。駅には、おふう夫妻が出むかえていた。

おふうの家は、東区舎人町の借家であった。せまい家には天井のひくい六畳の二階がある。その六畳間を弟たち親子のためにあけてあった。

「よう、いりやあたなも」おふうは言った。

「しかたがねえわさ」市之助は、そう答えていた。

名古屋へ落ちついた市之助は、おふうの夫に連れられて、日雇人足に出たし、おまつは町の中にある、陶器の人形を作る工場で、人形に絵具をぬる仕事についていた。

おふうには子供が三人あって、長男はすでに妻を持つて独立し、長久寺と云う高台から名古屋城のよく見える寺のある町に住んでいた。娘は結婚をしていたし、下の息子ももう一人前で、おふうの話によると、三人とも腕のよい陶器の画工であるということであった。

二十七になる長兄は、新妻と二人で栄町にある名古屋陶器株式会社の工場に通って、画をかくていた。健助は、

その従兄の弟子になって、名古屋陶器株式会社の工場へ通うことになった。

会社では健助を一時間、二銭で雇ってくれた。画書きたちの仕上げた、陶器を運んだり、ほこりをふきとったりする下働きである。従兄は、休みの時間に、画筆をとって、線を引くことや、一筆で、バラの葉や花を書くことを教えてくれた。

母が病気で小学校は四年までしか行けなかったが、画を書くことはすきだったので、熱心におぼえようとはげんだ。

「この児は手筋が、えゝようだ」従兄はおふうに言った。そうして四月ばかりの間に、暖かい名古屋の冬も過ぎ、春風が吹き初めると市之助は、信州日本アルプス山麓へ帰らねばならなかった。信州の寒風の中で、根雪の下で、麦は地中深く根を張り、桑は芽ぶく準備をしていた。

名古屋での生活の間に、健助の妹はジフテリアを患って死に、覚王山の共同墓地に埋められた。信州へ帰る市之助は、おふうのところに健助をのこし、来る時は五人で来たのに、帰りには三人になって、春風とともに去った。

会社での健助の賃金は少し上って、一時間三銭になり、どうやら口すぎができた。おふうは五十を過ぎていた。背が高く、ふとった人であった。夫や子供を仕事に送りだすと、一人家にのこって、竹の箸をけずる内職をしていた。三人の子供を大人にまで育てあげたおふうは、十四才になった健助を、新しい子供ができたように可愛いがり、自分の家から会社へ通わせた。

健助にとってこの世で一番やさしい伯母であった。ときどきピンク色の五十銭の紙幣をくれた。舎人町の近くのお寺の庭を通じて、電車通りに出ると、第二世界館という活動小屋があった。活動写真は十五銭でみることができる。大須や広小路にある活動写真は三十銭だったから、そちらへは行かなかった。

尾上松之助や、沢村四郎五郎主演の忍術の映画や、アメリカ映画の「ジゴマ」「赤い手袋」「ライオンマン」「幽霊騎手」など、連続物であった。伯母からももう五十銭札を大切にしておいて、健助はほとんど毎週、活動写真をみに行った。

おふうは、健助に「活動写真は高きやあでなも、活動をみるよりも本を読みやあせ、本の方が安いぞな、字もおぼえられるでなも」と、言った。

本というのは駄菓子屋に売っている。立川文庫の豆本である。伯母は字は一字も読めなかったが、健助の父の、市之助の市という字だけは、どんなところからでも見つけ出すことができた。

「名古屋市」と、書いてある看板を見ると、「それみやあせ、あそこにも市上等兵がいるになも」と、指した。遠く信州、日本アルプス山麓の寒村で、小作百姓をしている弟を想って足をとめるのであった。

おふうには、市之助のほかにもう一人弟があった。その弟は北海道の札幌で、二十町歩ほどの百姓をしているというのである。二十の頃、北海道へ渡ったまま一度も帰っては来ないという。日露戦争に出征して、上等兵になって帰った市之助は、貧乏こそしているが偉い弟だと信じていた。

工場から帰って夜になると、伯母に言われたように、駄菓子屋から豆本を買ってきて、声を立てて伯母に読んできた。そうすると伯母は錢をくれたからである。荒川熊蔵、真田十勇士、荒木又エ門、豆本は一夜で軽く読み終るので、駄菓子屋の本は、二カ月もたゝぬうちに全部読み終ってしまった。すると伯母は、鍋屋町の貸本屋へも入会金一元を払って、あとは一冊二銭払えばどの

本でも借りてきて読めるように手つづきをしてくれた。

「お寺の和尚さまの説教より、本の方が面白いぞなも」と、伯母は言つて、どんな本に書いてあることでも、それが本に書いてあるから真実だと思ひこんでいた。ことに村上浪六の書いたものが大好きであつた。

おそらく伯母の一生のうち、この頃ほど充実した時はなかつたのではあるまいか。名古屋の町の底辺で、日雇い人足の妻として一生をすごし、自分の子供を一人前に育てあげたあと、弟の子供を引き取つて、めんどろの見られる境遇になつて、初めて人生に安らぎを見出したのではないだらうか。

伯母と、信州の山の中から出てきた世間知らずの少年との生活は、健助が、かぞえ年十五になつたとき、終りを告げなくてはならなかつた。

大正十年の春、ひどい不景氣がおそつてきた。

会社への往き帰りに通る、鍋屋町の町角でドイツのマルク紙幣が、大道商人によつて売られていた。10マルク紙幣が一枚五錢であつた。

従兄の話によると、名古屋陶器株式会社の倉庫には製

品がストックして、もう入らなくなつてゐるという。五百人あまりもいた画工を、百人にへらすことになつたということで、ドイツのマルク紙幣を売っている夜店を四、五回見た頃、従兄夫婦も健助も、会社から解雇通知を受けた。

残つた百人の画工たちも、賃金は半分に値下げされたと従兄は伯母に語つていた。

失業した従兄は、毎日、町の中を仕事をさがして歩きまわつた。そのうちに、彼が自慢していた左手の金の指輪が、手から消えていた。従兄の弟の方も、兄に一カ月ほど遅れて失業し、毎日寝ころんで、健助の読み古した二銭の豆本を読んでいた。その頃、従兄の新妻は子供を産んだのである。

健助を信州へ帰そうということになつたのは、その頃であつた。伯母は涙を流して、「不景氣になつたのじゃ、市上等兵のところへ歸つて、百姓を手伝つていやあせ、景氣がよくなつたら、すぐにもよんでやるになも」と、なんども健助を説得した。

伯母の夫も仕事にあぶれて、むなしく歸つてくる日があつた。

平和だつた伯母の一家に、危機が来たのである。伯母

も健助に、ピンク色の五十銭紙幣をくれなくなって久しい。健助は活動写真が見られないので、千種の駅や、鶴舞公園や、広小路の通りなど、あてもなく歩きまわっていた。広小路の通りの中央には、大きな大砲の弾丸が、空を向いて立っていて、電車道は、そこへゆくと、大きく半円を描いていた。健助は、大砲の弾丸を形どった記念碑の前の草原に寝ころがって、空をいつまでもながめたあげく、暗くなると伯母の家に帰っていった。

千種の駅で、伯母の泣き顔に見送られ、父市之助の大好物だという、金山寺味噌を土産に持たされて帰ったのは、信濃路も青葉にむせかえる初夏の頃であった。

父市之助の家では、新しい母の連れてきた女の児が死んで、かわりにまた新しく女の児が産れていた。

「一貫目八円になるといった繭の値をきいて、名古屋から急いで帰ってきたが、蚕を飼いあげてみると、一貫匁二円五十銭にしかならなんだ。信州は去年から不景気だった」従兄からくわしい便りを受けて、健助の帰るのを知っていた市之助は、そう言って健助をむかえた。

第一次世界大戦で急速に膨張した、戦勝国の経済が、その頃、行きづまりを見せたのだ。国外に市場を求めて発展していた生糸や、高級陶器の輸出はストップし、不

景気はいつ立直るとも見通しがつかなかった。

「半年や一年じゃ、名古屋には帰れんぞ、せっかく習いはじめた画書きだが、これでダメだな」

その秋まで、市之助を手伝って百姓していた健助は、松本市の在にある瓦焼屋へ弟子入りをさせられた。

「百姓ならいつでもできる、若いうちに腕に職をつけときや、食いっぱぐれはねえぞ」市之助はこう言った。他人の中に出せば、どうやら口すぎくらいできるように育った健助を、いつまでも家においてはくれないかった。貧しい者の生活は、食うか食えないかの、いつでもその対決の前に立たされていた。

信州の瓦焼屋というのは、一人か二人の職人を使って、親方自身も共に働く、ささやかな農村の手工業である。健助は二十一才の兵隊検査まで年期をつとめて、金五十円というやくそくで、そんな瓦焼屋の弟子にしてもらった。

この親方のところには、職人が二人と、兄弟子が一人いた。親方は職人の作り上げた瓦を三日に一度、カマに入れて焼き、そのほかは松本の町や、近村を自転車で歩きまわって瓦の売り込みをやっていた。瓦を買うほどの者は、町に新築される家とか、農村に入れば地主ときま

っていた。

町の労働者や農村の小作人では、瓦などは、一枚も買えない。町の労働者は借家に住み、農村の小作人は草葺屋根に泥壁の小屋に住んで、かろうじて露命をつないでいるに過ぎない。農村の地主は瓦葺で白壁の土蔵と高塀に囲まれて住み、村会議員や、学校の先生になって村を支配していた。

町で家を建てるほどの者は、町の空地に貸屋を建てて家賃を取り立てる家主である。

瓦焼屋の親方も、そういう高級な部類の人種ではなかった。小作土地を一町歩ほど耕して、その土地からあがる収益で食糧を確保し、瓦焼きして現金収入を計るという経営方針であった。親方は瓦の売り込みにいくので百姓はやらす、田畑は女房の指揮で弟子たちが耕していた。

だから瓦焼屋の弟子になったけれども、健助はほとんど瓦を作る仕事を教えられたことはない。三日に一度、親方の瓦を焼く手伝いをさせられて、そのほかは親方の女房や兄弟子といっしょになって毎日百姓仕事を、手伝った。

大工のところでも、子供の体力では背負いきれない労働をさせられたが、この瓦焼屋でも、弟子とは名目だけ

で、年期奉公という、もっとも安価な方法で、安い農業労働者を使って小作百姓をしているのである。

親方のところには子供が五人あった。一人も死んでいないのは、ズブの小作人よりは、やり口が上手なので生活にゆとりがある故であろう。それでも上の女の子二人は、小学校が卒ると、町の製糸工場へ女工に出していた。そのようにしても、雇っている職人の労働賃金を支払うのに、苦勞しているようであった。

せめてのめつけものは、瓦焼屋の女房が弟子や職人に食わせる飯は、大きな茶碗に力いっぱい押えつけて、ちょうど死人の枕元へそなえるように山盛りにしてくれたことだ。職人はその飯を二杯しか食えなかったが、育ち盛りの弟子は三杯食った。三杯食うと、さすがに腹いっぱいになる。弟子は一日に一升飯を食うということであった。

雨の降る日は野良仕事ができないので、その時だけは職場にはいつて瓦を作る練習ができた。粘土をこねて瓦を作るといふ作業は単純な仕事で、百姓仕事に追いかわれながら雨降りに練習したくらいでも、五年も年期をつとめれば、どうやら人並みに習得することができた。兄弟子の虎は、雨の降る日を何よりのたのしみにしていた。

朝起きて雨が降っていると、兄弟子は上機嫌で唄を唄うのであった。

「おれにキンギョケンなせくれぬ、ヨイヨイ、デバクラシー」と、いう唄である。松本の町の辻で、バイオリンをひいて唄っていた民権運動の青年から、一度きいてきておぼえた唄だということである。

その唄が何を意味するのか、弟子子の健助にはわからなかったが、ずっと後になって、「おれに選挙権なせくれぬ、よいよいデモクラシー」と、いう意味であったと気がついた。小作人や職人には、まだ選挙権のなかった時代、自由民権運動の壮士たちは、はげしい運動をすると同時に、町の辻に立って、バイオリンをひき、唄でケイモウ運動をしていたのであった。

親方も職人も兄弟子のデバクラシーもキンギョケンも訂正はしない。「今日は虎のごきげんの雨降りだ」と、唄をきいて笑っていた。

雨の降る日は虎や健助のデバクラシーだ。瓦を作ることも練習したが、健助は漫画を書いたり、粘土でいろいろなものの形を作ってみせて、親方の子供たちを喜ばせた。親方の女房は雨の降る日は、うたたねをして骨休めをした。

職人たちが健助の漫画や、粘土細工を見て、「おめえは鬼瓦を作ることを習うと、上手にできるぞ」と、言った。名古屋で画を習ってきた健助は職人達から見ても、粘土細工は上手であった。

瓦焼きて三年が過ぎた。名古屋の伯母が脳溢血であっけなく死んだと、市之助の家へ行った時知らされた。健助はもう名古屋での生活を忘れかけていた。彼もいつか十八になっていた。兄弟子の虎はもう二十だ。相変らずデバクラシーを唄っていたが、職人としての腕前は半人足だった。虎は声がよくて、よく唄った。いまでも記憶にのこる唄がもう一つある。

世界で長いもの何じやろう

万里の長城に象の鼻

ショウカチ小便、ロシヤさわざ

と、いうのである。その頃ロシアでは、まだ革命さわざが片づいていなかった。

その春、北海道の監獄部屋から帰ったばかりだという、伝馬伝吉という職人が親方の職場へ就職した。

伝馬伝吉は三河高浜の出身だった。瓦職人としての腕

もよかったが、力も人並みの少なくとも二倍はあった。「監獄部屋なんでものは何んでもねえところさ、仕事さえてできれば文句はねえ、また秋になったら北海道へ行くぞ」伝吉は、そう言っていた。彼は監獄部屋へ入るに先だって募集員から金を五十円先借りをし、その金で呑んで白首を抱いて、命のせんたくを充分したあと、監獄部屋にはいるのだという。

まことに便利な男で、監獄部屋に入っている間は、女も欲しくないし酒も呑みたくないという。五十円の前借りをすれば五カ月からなくては返せない、十人募集されて入ったうち、三人くらいは死ぬ、三人くらいは半病人になる。「なあに死ぬ奴も、病気になる奴も、ハシタ者さ、強い奴は屁でもありやせん」

「なぜ五十円の前借りをするのかね。そんな金借りなければ行かなくてもいいのに」健助は言った。

「わけあいろいろあらあな。シャバで食いつめた奴もおれば、借金で首のまわらなくなった奴もおる。その五十円がどうしても無くてはならねえような奴さ」

「伝吉さんもそうだったのかね」

「バカヤロー」伝吉はそり身になって大笑いして、

「このシャバで、まっぼろに働らいていれば、五十円と

いう金はなかなかのこるものでねえ。女を思いきり抱いて、酒を水呑むように呑むにや、少くとも五十円は欲しい。俺はそれが一度やってみたかったから、五十円の前借りして監獄部屋にはいったのさ。たった今でも千両の銭かっぱらって十年本物の監獄に入れるというなら、おらあやるぜ、けれど盗みたくても、かっぱらいたくても、その千両と云う銭のあるところを知らねえから、やらないまよ」伝吉はそういう物騒な男であった。

物騒ではあるけれども、氣っぷの好い男であった。三日も黙々と働らくと「親方、たまった稼ぎをもらいてえ」そう言って一日一円ほどの割で親方から金を受けとり、夜あそびに出かけ、何となく一夜で使いはたしてしまつた。

松本の横田町の女郎屋では八十銭で、チョイの間の女を抱かせたし、二円五十銭あれば本部屋へ入れて泊めて帰した。酒が一升五十銭である。コップ酒が六銭で、一合正味入るコップから盛りこぼれる奴を皿に受け、コップを呑みほしたあと、皿に溢れた奴をコップに入れると半分近くある。伝吉は、そのコップ酒を五つ呑んで、五十銭出し「ツリはいらねえぜ」と、大見栄をきり肩で風をきって呑屋を出る。「まいど済んません」女の声を後

ろにきいて、よろりと足を踏みちがえ、ホロ酔いで町を歩くのに生甲斐をおぼえるのであった。

伝吉はときどき、虎と健助を夜あそびにさそい出し、大鍋に馬肉を山盛りに煮て、「さあ食え」と、言った。ある時は菓子屋へ連れて行って、大福を虎と健助に食くらべさせて面白がっている。人のこわがる監獄部屋を屁とも思わないこの男は、健康で明朗で、疲労というものを知らないふうであった。そうしていつでも着たきり雀だった。そのかわり育ち盛りの弟子たちと同じように、飯だけは三杯食う。まだそれでも足りなくて、夜あそびに出ると、菓子や肉を食いあさって歩く。体格も人並みすぐれ、十六貫の米俵を、右と左の両手に持って、軽々と両肩へのせる力持ちだ。

この伝吉が夜あそびに虎と健助を連れだした時、「瓦焼屋の弟子に来て、天氣の好い日にゃ百姓させられるなんてことは、おれは氣にくわねえ、弟子なんか、やめてしまえ、お天道様と米の飯あ、ついてまわらあな、ここばかりに日は照らねえぞ」と、言った。

「そりゃ、そうだけど」健助はうなずいた。瓦焼屋で三年すごす間に、体はいつか五尺五寸になり、体重は十五貫、二つ年上の虎と交らない大男になっていた。

「ウズラしちまえ、それだけになれば、どこへ出たって、メシを食わせて一日五十銭くれえは出す。おめえ達がウズラする気ならおれがつれだしてやるぜ」伝吉は瓦焼屋の親方のやり口に義憤を抱いていた。

ウズラというのは逃亡のことである。

「ウズラもいいね」健助が答えた。

「よしおれが連れてってやる」伝吉はうなずいた。

「けどおらあ、あと一年すりゃ年期が明けるでなあ……」と、虎はつぶやいた。

「そうか、そうだな、年期が明ければ五十円もらえるな。そうだ虎公、おめえはこの、健公だけ連れてってやらあ。」

日中、仕事をしている時は、つぎはぎだらけの服装だが、夜あそびに出る時は、弟子も三年以上つとめると、つぎの当らない腹掛に股引、ハッピだ。その夜、健助は伝吉に連れられて、夜あそびに出たままウズラをきめこんでしまった。

その夜は夜通し歩いて、親方の瓦焼屋から五里ばかりはなれた、赤鬼田^{あかおにた}という部落にある瓦焼屋へ着いたのは、翌朝の十時頃であった。赤鬼田の瓦焼屋の庭先へはいって行った伝吉は、ちょっと腰をかがめて、そこにいる人

に向い、

「おひかえなせえ。発しまする、てまえ生国と申しまするは三州、三州と申しましても広うござんす。三州は、三河の海にのぞむ高浜にござんす。高浜は藤十の弟子になりましたのが、明治四十四年五月、年期の明けましたのが大正五年十二月、以来みなさま同職の端に加えていただき、今日に至りました。姓は伝馬、名は伝吉と申します。また後にひかえますのは、健公と申し、縁あつて手前の弟子となつた者にござんす」

伝吉の齒切れの好い口上の中で、健助はいつの間にか伝吉の弟子になつていた。

仁義の口上というものは、一般にはヨタ者かバクチ打ちの独占みたいと思ひ込まれているが、それは間違いだ。明治、大正、それ以前には働く者のものであった。ただそれを今日ではヨタ者が伝称しているだけにしか過ぎない。古い時代には働く者の世界には社会保障制度というものは何もなかった。働くものが失業したり、伝吉や健助のように自分の都合から職場をほうり出して失業したものは、次の職場で仕事につくまで、同職の門戸を叩いて、自己紹介をする口上を仁義と言つたのである。いわば名刺のかわりである。

これは瓦焼職人の世界だけではない、桶屋、大工、左官も、飾職人も土方も、働く者すべての世界に、みな行なわれていた。まず自分の出身や、姓名を明らかに名乗り、しかる後に、相手方へ就職のあつせんを申し入れるのである。

幸いに差し当つての仕事があれば、たとえ三日でも働かせた。そうしてやるのが同職としての務めであり、義理であつた。当時の人々は、それを固く守つて、同職を路頭にまよわせるようなことはしなかった。

また、たずねてきた同職に与える仕事のない場合、いくばくかのワラジ銭を包んで渡し、次の同職をたずねる道順をていねいに教えてくれるのであつた。そして夕方であれば一夜の宿を貸し、翌朝、朝食を与えて、ワラジ銭を持たせて送り出すのである。これを一宿一飯という。「健公、おめえ、おれの弟子にされて、びっくりしたろう。けどな、おめえには仁義の口上は述べられまい。仁義の口上の言えるまで、俺の弟子ということになつていろ。弟子なら黙つていてもいいのだ、一人前の職人なら口上を述べなければならんからな」

ワラジ銭をもらつて、道へ出てから伝吉はそう言つた。ワラジ銭の紙包みを開いてみると、二十銭はいつてい